

高齢者の人権に係る課題

3 認知症になっても安心して暮らせるまちづくりの推進について

概	認知症施策推進大綱を踏まえ、認知症の発症を遅らせ、また、認知症になり生活上の困難が生じた場合でも、重症化を予防しながら、周囲や地域の理解と協力により、住み慣れたまちで自分らしく安心して暮らし続けることができる社会を目指し、取り組んでいます。
要	特に、認知症への偏見をへらし、認知症への理解を促すために、認知症オレンジLINEを通じて、認知症サポーターや認知症に関心のあ る人に情報発信を行っています。さらに、認知症サポーターには、行方不明者の情報を発信し、見守りや捜索協力を依頼しています。 また、関係団体による認知症カフェの支援をはじめとしたネットワーク構築を行い、認知症の人を中心に認知症の人に寄り添う活動への展開を目指しています。

評価 視点	A 取組状況や優れている点	B 問題点・課題	C 今後の展開	D この施策・事業の意見
① 人 権 擁 護 の 担 保	【相談体制、家族支援】 ・精神科医による月2回の相談対応、保健師などが電話・面接・訪問により随時相談に応じている。 ・認知症の疑いのある在宅の市民を対象に、認知症専門医の指導の下、保健師等の医療職、社会福祉士をはじめとした福祉専門職2名以上を構成メンバーから構成される認知症初期集中支援チームが訪問し、観察・評価、家族支援等の支援を包括的・集中的に行っている。概ね6カ月の支援期間に必要な医療・サービスにつなげ、認知症になっても安心して在宅で暮らせる環境づくりを支援している。 ・にこっとチーム追浜 ・にこっとチーム汐入 ・にこっとチーム久里浜 ・にこっとチーム秋谷	・認知症の相談窓口の周知が不十分。横須賀市高齢者福祉に関するアンケートにおいて、相談窓口を知っていると答えた人は31.1%（地域福祉課総合相談担当）。	・早期に相談できるよう周知用チラシを認知症関係機関（医療・介護）に広く配布し、相談窓口の認知度を高めていく（地域福祉課総合相談担当）。	a.

評価 視点	A 取組状況や優れている点	B 問題点・課題	C 今後の展開	D この施策・事業の意見
① 人 権 擁 護 の 担 保	<p>【施設における身体拘束】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虐待防止マニュアルでも示す通り、身体拘束による被害、身体拘束の具体例とともに「緊急やむをえない場合」について切迫性、非代替性、一時性を示しその際の対応方法を示している。 ・身体拘束に限らず虐待防止ネットワークミーティングとして、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、養護老人ホーム、軽費老人ホームの各協議会等の代表と、警察、弁護士会、司法書士会、医師会、行政などが参加し、虐待に関わる情報共有を図っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・介護職員の不足や認知症対応の困難さ、転倒事故への不安などから施設で身体拘束をなくしていくことの困難さがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関と情報共有を図り、定期的な研修を実施していくことで、緊急やむをえない場合を除いて施設での身体拘束がされることがないように図っていく。 	<div>b.</div>
	<p>【病院における身体拘束】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病院で身体拘束を行う場合は、多職種の医療者で検討して状況を記録し、患者や家族の同意を得て必要最小限の範囲で行われている。身体拘束を行わなければ救命や治療が行えず生命に危険が及ぶと判断される場合には、患者や家族の同意がなくても、医療者の倫理に基づき身体拘束を実施されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入院加療に伴うせん妄で、転倒による骨折や人口呼吸器の抜管、点滴の自己抜去など医療事故に繋がり適切な治療が行えない恐れがある。 		<div>c.</div>
	<p>【認知症予防】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認知症予防教室参加者が、認知症予防だけでなく、認知症への理解を深めることができるよう、令和3年度に教室内容の見直しを実施。（認知症予防教室に「認知症の理解」の講義を追加） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「認知症施策推進大綱」においては、予防と共生を共に進めることになっているが、「認知症予防への関心は高まっているが、「認知症共生社会」への関心は、ある特定の方々にとどまっているため、今後、関心のない方々に働きかける取り組みを行う必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見直しの評価を行い、より良い教室内容へと改善していく。 	<div>d.</div>

評価 視点	A 取組状況や優れている点	B 問題点・課題	C 今後の展開	D この施策・事業の意見
① 人 権 擁 護 の 担 保	<p>【認知症オレンジパートナーによる支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> 認知症への理解を促すために、認知症サポーター養成講座を実施し、さらに、認知症サポーターがボランティアとして活動できるような体制を構築している。 	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、認知症サポーター養成講座の実施数が減少。 認知症オレンジパートナーの活躍場所が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 9月のアルツハイマー月間に合わせて、パネル展示や講演会を実施し、認知症への関心を促す取り組みを実施する。 認知症オレンジパートナーの活躍する場及び、認知症カフェなどでオレンジパートナー募集の周知を図る。 	<div>e.</div>
	<p>【よこすかオレンジLINEによる情報発信】</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和2年9月から認知症への理解を促すために「よこすかオレンジLINE」による情報発信を開始。 認知症オレンジパートナー登録説明会時に、当事者家族のインタビュー動画を作成し、活用。 <p>◎ 登録者数（令和4年3月現在）</p> <p>認知症サポーター：1,505人</p> <p>認知症オレンジパートナー：85人</p> <p>◎ 配信数</p> <p>認知症コラム：12回（月1回）</p> <p>行方不明者情報：3回（令和2年度）</p> <p>行方不明者情報：6回（令和3年度）</p>	<ul style="list-style-type: none"> 横須賀市の公式LINEを利用しているも「よこすかオレンジLINE」は存在を知られていない。登録者を今後どう増やしていくかが課題。 認知症高齢者が行方不明になった際に、活用できることを介護家族だけでなく、ケアマネジャーにも周知をする必要がある。 様々な立場の人に、コラム作成を依頼していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 認知症サポーター養成講座及び認知症オレンジパートナー養成講座において「よこすかオレンジLINE」の周知を図る。 コラムの一般募集を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「よこすかオレンジLINE」は良い制度であり、地域の見守りが必要とされるなかとても有効な手段であることから、工夫して周知を図る必要がある。（第1回議事録P3）

評価 視点	A 取組状況や優れている点	B 問題点・課題	C 今後の展開	D この施策・事業の意見
② 当事者の視点	【当事者意見の施策への取り込み】 ・神奈川県が令和3年4月認知症オレンジ大使を任命した。横須賀市では2名の方が任命されている。現在、意見聴取や声を発信することは行っているが、今後、施策に本人の声を取り入れるために当事者の参画を検討する必要がある。	・認知症オレンジ大使への依頼が増えることにて、大使の方が、負担感を抱かないような配慮が必要である。	・かながわオレンジ大使のコラムを「よこすかオレンジLINE」に配信する。 ・認知症高齢者等支援連携会議への参加について進める。 ・本人の声を会議に取り込むため、まずはオレンジ大使に会議に参加していただき、本人の声を施策に反映させられるよう取り組む（地域福祉課総合相談担当）。	<div>f.</div>
	【若年性認知症の本人ミーティングの実施】 ・令和2年度から若年性認知症支援コーディネーターと協力して若年性認知症の本人ミーティングを開始。 *若年性認知症支援コーディネーター：平成30年度より神奈川県に2人、令和3年度、4人配置されている。	・広域で実施しているが、参加者が少ない。対象者が少ないため、若年性認知症支援コーディネーターと連携して個別につないでいる。	・実施場所や時間について検討していく。	・社会参加したいという思いに応える働けるデイサービスができるとよい。（第2回議事録P7）
	【周囲の理解高揚・情報共有】 ・認知症の家族の介護に関する情報交換や介護の苦勞・悩みなどを本音で語り合える場として「認知症介護者の集い」を年6回開催している。	・新型コロナウイルス感染症の影響で開催が中止となったり参加者が減少している。	・オンライン開催など実施方法を検討していく。	<div>g.</div>

評価 視点	A 取組状況や優れている点	B 問題点・課題	C 今後の展開	D この施策・事業の意見
③ 周 知 啓 発	【市の支援内容の周知】 ・認知症ケアパス、認知症お役立ちブックを作成、配布している。	・認知症の相談窓口の周知が不十分。 （横須賀市高齢者福祉に関するアンケートにおいて、相談窓口を知っていると答えた人は31.1%）	・認知症ケアパスの配布と合わせて、認知症お役立ちブックを作成する。作成に当たっては、認知症当事者の意見を取り入れたり、職域の人を対象に生活上の課題に合わせた内容にしたりすることで、関心のない方々が関心を持つきっかけにしたい。また、若年性認知症を対象にした認知症お役立ちブックも作成する。	<div>h.</div>
	【周囲の理解高揚】 ・アルツハイマー月間に「オレンジ色を身に着けよう」キャンペーンを実施。 ・北口掲示板、コースカベイサイドストアーズ等でパネルを展示。	・認知症に関心をもってもらうため、啓発先を広げていく必要がある。	・現在、イベントが自粛となっており、非接触型のイベントを実施する。	<div>i.</div>
④ 関 係 機 関 等 の 連 携	【事業者との連携】 ・横須賀市医師会、エーザイ株式会社と「認知症をみんなでささえるまちづくり協定」（平成29年4月14日）。 ・神奈川歯科大学と「認知症トータルヘルス事業連携協定」（令和3年3月11日）。	・移動手段・交通安全等に関連する企業と連携し、ネットワーク構築が進んでいない。	・「よこすかオレンジLINE」、「認知症お役立ちブック」の周知、活用を通して、民間企業との連携を図る。	<div>j.</div>
	【認知症高齢者支援連携会議の開催】 ・「認知症施策推進大綱」における「本人の意見を重視した施策の展開」を目標とした認知症高齢者支援連携会議を開催している。（地域福祉課）	・当事者本人の出席がないため、当事者の声を取り入れられていない（地域福祉課総合相談担当）。	・認知症高齢者等支援連携会議への参加について進める。 ・本人の声を会議に取り込むため、まずはオレンジ大使に会議に参加していただき、本人の声を施策に反映させられるよう取り組む（地域福祉課総合相談担当）。	<div>k.</div>

評価 視点	A 取組状況や優れている点	B 問題点・課題	C 今後の展開	D この施策・事業の意見
④ 関係機 関等 との 連 携	【行方不明時の対応】 <ul style="list-style-type: none"> ・にこっとSOSネットワークの構築（地域福祉課総合相談担当）。 ・認知症高齢者等が行方不明になったとき、行政センターや地域包括支援センター等へ連絡するとともに「よこすかオレンジLINE」により認知症サポーターや認知症オレンジパートナーに捜索協力を依頼し、早期発見に努めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「よこすかオレンジLINE」で行方不明者情報を配信しているが、タイムラグがある。 ・多くの市民に周知し行方不明者を発見するために、庁内で防災メールや防犯メール利用などの横のつながりが必要。 ・個人情報の保護については十分な配慮が必要（地域福祉課総合相談担当）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行方不明状況の的確な聞き取りを行い、迅速な処理を目指す。庁内の横のつながりについては、関係部署と検討する（地域福祉課総合相談担当）。 	<div>1.</div>
	【認知症カフェの支援】 <ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェ連絡会の開催。（市内の認知症カフェを対象に連絡会を開催し、情報交換を実施） ・認知症カフェに関する周知や立ち上げの相談を行っている。認知症本人の居場所だけでなく、介護家族が相談できる場にもなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染拡大予防のため、中止となっている認知症カフェが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェ連絡会は継続実施 ・「通いの場」が拡大する中で、認知症カフェに特化した支援が適切か。地域の中では自然な形で認知症の方を受け入れている現状があり、横須賀市における認知症カフェのあり方をこれから考えていく必要がある。（第2回議事録P4） 	<ul style="list-style-type: none"> ・拠点があると活動しやすいので拠点づくりを進めていけたらよい。（第2回議事録P6）
	【関係団体との連携】 <p>「認知症のひとと家族の会」、「若年認知症の会たんぽぽ」、「認知症フレンドリーよこすか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若年性認知症の会（たんぽぽ）では、家族会や認知症オレンジパートナーの協力のもと、参加者を本人と家族に分け、家族の相談会を行う時間も設けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々なイベントなどを通じて、認知症への関心を高めてもらう取り組みを関係機関と一緒に進めていたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でイベントが開催できず活動が鈍化している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業連携は引き続き実施 	<div>m.</div>

評価 視点	A 取組状況や優れている点	B 問題点・課題	C 今後の展開	D この施策・事業の意見
⑤ 研 修	<p>【セミナー・講演会による理解増進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認知症介護市民講演会を開催。 ・認知症予防講演会の開催。 ・多職種セミナーの開催（地域福祉課・地域包括ケア担当）。 ・認知症サポーター養成講座の受講者に対し、認知症オレンジパートナー養成講座の受講を促し、さらに具体的な活動につながるよう支援している。 ・介護事業者を対象に虐待防止センター主催で年3回、開催。 <p>《令和3年度開催実績》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「高齢者虐待防止の基本」認知症介護研究・研修仙台センター 吉川悠貴主任研究員 ・「弁護士による、介護現場における虐待の予防と対策」 外岡潤弁護士 ・「身体拘束についてー認知症の対応の困難さに注目してー」横須賀老人ホーム 佐野芳彦所長 	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症予防講演会等は関心が高く参加者が多いが、関心の無い方々に対するアプローチが必要。 ・講演会は感染対策上、人数制限がある。また、オンライン研修は、参加者に更に偏りがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者にもオンライン研修に参加できるように、他の講座等の機会を利用しスマートフォンの操作方法を教示する。 ・広報だけでなく、ホームページや「よこすかオレンジLINE」を活用して周知に努める。 	<div>n.</div>
⑥ そ の 他	<p>【更なる連携を図る仕組み「チームオレンジ」の整備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認知症施策推進大綱における「認知症バリアフリーの推進」の中で、当事者・家族のニーズと認知症サポーターを中心とした支援をつなぐ仕組み「チームオレンジ」の整備が求められ、検討を開始。 	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症サポーター、認知症オレンジパートナー、キャラバンメイトは各々の目的が異なり、理解しづらい状況である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・横須賀市における「チームオレンジ」の在り方について検討を進めていく。 	<div>o.</div>